

協同の系譜 ⑥

第1部 川崎 平右衛門

農民の納得と協力

治水への感謝今なお

寛延2(1749)年に美濃国本巣郡本田陣屋に支配替えになった川崎平右衛門は、長良川の水勢を緩和するために開削された大樽川(おおくれがわ)が、かえって揖斐川筋や大樽川流域に洪水を引き起こしていることに対処するため、反対する長良川側の農民との利害調整に腐心しながら、大樽川食塩堰(くいちがえぎ)を完成させた。

費用40万両の大事業

この薩摩藩負担による御手伝普請は、目標をほぼ完全に近い形で実現したものであったが、当初予定されていた工事費8万両が最終的には40万両にまで膨れ上がった空前の大事業であった。当時、藩財政は66万両の借財を抱える中、まさに「薩摩藩の血涙のにじみ出した資金」によって工事費は賄われた。

農的デザイン研究所代表 葛谷栄一

川の流れ地点である油嶋で、大樽川には平右衛門による食塩堰とは別に薩摩洗堰(あらいせき)が設けられ、油嶋では堤防締め切り工事が行われた。

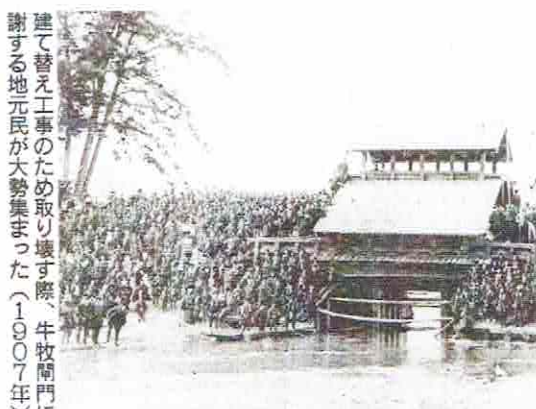
られ、幕府への怨念は強く、明治維新にも少なからざる影響をもたらしたとされる。

幕府が見放すも続行

この間の平右衛門の活躍について、「一事が万事そのやり方が民主的であり、農民の納得、信頼を得てその協力の下に遂行された。しかし、工事費が予定外に膨らみ、幕府から見放される状態ともなったが、初志を貫き、農民も平右衛門を信頼し、工事完成を望む農家を転々とし、寄食をしながら工事を続行した」と伝えられている。

また、平右衛門は治水工事に当たっては、広域での対処が肝心であり、互いに痛みを分かち合いながら、あくまで公益を優先して事を運んでいくことを基本スタンスとした。

こうした平右衛門の働きと人徳をたたえて穂積町(現瑞穂市)には川崎神社が建てられるとともに、興隆寺では今日に至るまで平右衛門の命日には法要が続けられている。(次回は18日付)



建て替え工事のため取り壊す際、牛牧陣門に感謝する地元民が大勢集まった(1907年)